誘鬼燈

ゆうきとう

森村誠一

誘鬼燈

森村誠一

文藝春秋

森村誠一（もりむら・せいいち）

昭和8（1933）年，埼玉県熊谷市に生まれる。青山学院大学英米文学科卒。ホテルマンとして勤務するかたわら評論，小説を書く。43年夏より文筆業に専念。翌44年「高層の死角」で第15回江戸川乱歩賞を受賞。以後社会派推理の旗手として多くの読者をもつ。作品に「鍵のかかる棺」「人間の証明」など多数がある。

誘鬼燈

昭和五十一年四月一日　第一刷

著者　森村誠一
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三
印刷　共同印刷
製本　矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Seiichi Morimura 1976　Printed in Japan

長篇推理／誘鬼燈／目　次

誘鬼燈

踏みにじられた桃園……7
峠の凶賊……30
過去の基点……51
凶行の軌跡……71
切れたヒモ……105
天国の先客……151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

主従の置換……171
交叉した足跡……188
マスコットの告発……222
バトンのないリレー……239
姉妹凶器……261
跳躍した凶手……272
忌まわしき愛の形見……292

装画・本文挿絵　安岡　旦
地図・カット　原アート
アクチュアル

誘鬼燈

踏みにじられた桃園

1

この北辺のさびれた町には珍しいスマートなアパートであった。最近流行のユニットハウスのアパート版で、近くの小川原湖の工業開発による土地成金が家主である。

長方形の箱を積み重ねたような、機能本位の味も素っ気もない建物だが、それがこの近辺では都会的に映るのである。軽量鉄骨の二階建て、ワンフロアに四世帯ずつ、八世帯が入居している。屋根、外壁、間仕切り、床、天井などすべてパネル化し、窓はアルミサッシ、室内もバス、トイレット、キッチンなどのユニットがコンパクトにまとめられている。

地元の人間に言わせれば、金庫のような家だが、気密性満点のプライバシーを保障された機能的な住み心地は、隙間風の吹き抜ける採光性不十分なうす暗い土地の家とは比べものにならない。

居住者も仕事の都合で、この地方へ来た都会者ばかりらしい。窓にかけられた花模様のカーテ

ンや洗濯物などを見ても、住人の若さと花やかさがわかるようであった。

そのアパートは、町の南はずれにあってようやく開墾されはじめた原野に面していた。駅から歩いて十分、アパートと駅の間に細い農道があり、駅とこのブロックをつなぐ近道にあたるので、朝夕には通勤者がよく利用している。夜、駅から町の方角へ来る者は、町並みのはずれに暖かそうにともるこのアパートの灯を目標にして来る。ようやく暗い野原が終って、家並みのはじまる基点に建てられたアパートの灯は、ここまで辿り着いた人々をホッとさせるのである。

九月十七日の午後八時半ごろ、早くも最果ての地の秋冷を感じさせる夜、この道を南の方からとぼとぼと歩いて来る一人の男があった。よれよれのトレンチコートをまとい、背を寒そうに丸めている。男は暗い野原を横切って、ようやくそのアパートの前へ着いた。

「桃園荘か、ここだな」

男は、門灯に照らされたアパートの名前を確かめると、灯のついた窓を見上げた。暗い野の末から来た身に、花やかなプリントカーテン越しにうつるオレンジ色の灯は、その中でもたれているであろう家族の団欒を、あたかも別世界のことのように想わせた。美味そうな煮物のにおいが、男の鼻腔を刺戟した。

男は水っ洟をすすると、その窓のどこかにいるにちがいない女を訪ねるために、門を入った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

奥山千秋は、その中の一戸、一階の東寄り棟末の四号室に住んでいた。奥山省一と、一ヵ月前に結婚して、この新居に移り住んで来たばかりである。

これまでいた場所に比べて環境は寂しいが、それも優しい夫の愛情に包まれていると、苦にならない。むしろ、新婚生活のスタートは周囲に知人のまったくいない未知の土地のほうがうるさくなくてよかった。

土地も新しければ、住居も新しい。プレハブのユニットハウスなので木の香はしないが、畳は新しい藺草のにおいがする。カーテンも、戸棚も、布団も、照明具も、その他の家具も、なにもかも新しい。

夫の友人や親戚が二人の結婚を祝して贈ってくれたものもあれば、新たに買い整えた道具もある。結婚前から取っていた頒布会のセットも、間もなく完結する。これらの諸道具も、自分たちとともに存在のスタートを切ったのだ。言わば彼らは二人の新生活に付けられた護衛であった。

夫が仕事から帰って来れば、また二人だけの夜が来る。町そのものが世間から切り放されたような、本土の北端のそのまた町はずれのアパートの密室で、だれにも邪魔されることなく、たがいを確かめ合える。

これこそ千秋が憧れつづけた生活であった。どんなに夜遅くなっても、夫は必ず帰って来る。

帰って来ることがわかっている。たとえ社用で二、三日出張することはあっても、結局はここへ帰って来る。夫の生活の本拠は、ここにあるのだ。

それはこれまでの、男を迎え、また送り出しながら、今度はいつ来るのかとたずねる生活とはなんと大きなちがいだろう。

夫は自分の体を通過する男ではない。永遠に自分の中に留まってくれるのだ。自分が所有する男であり、自分のための男なのである。それはなんとすばらしいことだろう。

ままごとのようなチャブ台の上には、すぐにも食べられるように、夫の好物の手料理が並べられてある。今日届いたばかりの道具で丹念に焼いたケーキもある。みんな夫のために、午後の大半の時間を費してつくったものだ。

その夫がそろそろ帰って来るころである。千秋は壁の掛時計を見上げて、うすく頬を染めた。彼女にしては純情なことだが、夫が帰宅した後の行為を予測したからである。

それもまず風呂へ入り、夕食を摂ってからなどというのんびりした行為ではない。彼は玄関を開けて入って来るなり、自分を需めるだろう。入浴も食事もケーキも、食後の夫婦の団欒も、とりあえず体の餓えを欺した後のことだ。

おそらく自分はあらがう振りをしながら夫の需めに積極的に応じていくだろう。千秋自身がそれを待ちきれないくらいなのである。餓えるはずがないほど、昨夜たがいを貪り合った。それが一夜の眠りからさめると、自分でもあきれるくらいに、躰が弾んでいる。起き出す前に、ついた

がいの手足が触れ合い、いつの間にか愛撫の体位に移行する。だが、本格的な行為を完了するためには時間が足らない。また、夫は仕事のためにエネルギーをセーブしなければならなかった。そのためにいつも行為を中途半端のところで中断して、ピリオドを打つのは夜に譲る。朝の接触が前戯となって、夕方のころには、夫婦の体内に抑えようもないほど熱っぽさが内攻してしまう。今朝はその接触が濃厚すぎた。

放散しそこなったエネルギーが、放散の時間が近づくにつれて熱く内にこもってざわめき立つのである。

今日も夕餉の材料の買い出しに出かけて、売子に「奥さん」と呼ばれた。そのなんでもない呼びかけに、千秋は、ようやく手に入れた幸せをしみじみと噛みしめた。

人の妻になるなどとはおもってもみなかったことである。それが奥山にめぐり合ってプロポーズされた。最初はからかわれているとおもったくらいである。だが、奥山は真剣であった。奥山のような立派な大学を出た一流会社の技師が、どうして自分のようなあばずれにプロポーズしたのかわからない。

奥山は、過去なんか問題ではないと言ってくれた。「これからきみと築き上げる二人の将来が重要なのだ」と熱っぽく迫った言葉が、まだ耳元に残っている。

そして結婚、——忌まわしい過去のすべてに訣別して、奥山に従いて、この北辺の町へ移って来たのである。

慌しい日々だったが、それは不幸から幸福へと一気に跳躍するための慌しさであった。

「奥さんか……」

千秋は、今日商店で言われた言葉を、そっと反芻した。それはようやく手に入れたいまの幸福を集約した言葉であった。

「なんだか夢みたい……」

彼女にはいまだに手につかんだ幸せの実感が湧かない。だが夢ではない。幸せはたしかに現実のものであった。

もう間もなく夫が帰って来る。そうすればその幸せを実証する具体的な行為が行なわれるのだ。

「私って、いやらしいわ」

火照った頬を押えて、彼女がもう一度つぶやいたとき、ドアにノックがあった。

「あら帰ってきたようだわ」

ノックに夫独特のくせがあった。待ちくたびれていた千秋は玄関口に飛び出した。

ドアアイから外を確かめもせずに、錠とドアチェーンをはずす。夫の留守中は、必ずドアアイから外を確かめた後、ドアを開くようにと、夫からやかましく言われていたのだが、彼の帰宅を待ちわびていたときでもあり、ノックに聞きおぼえがあったものだから、まったく無防備に開いてしまった。

「お帰りなさ……」と言いかけて、言葉が舌の先で凍結した。彼女は、そこに過去の亡霊を見て

いた。

「あ、あ、あなたは……」

驚愕のあまり、その先の言葉がつづかない。

「千秋、やっと探し当てたぜ」

よれよれのコート、膝の円くなったズボン、憔悴した顔に無精ひげがのびて、目ばかりが光っている。それは見るからにうらぶれた姿であった。

「ずいぶん小ぎれいに暮らしてるじゃねえか」

男は無遠慮な視線を室内へ注ぎ込んだ。千秋は、寝室に土足で踏み込まれたように感じた。そのとき男はすでにドアの隙間から中にすべり込んでいた。

「帰ってください。ここはあなたなんかの来る場所じゃないわ」

ようやく自分を取り戻した千秋は、精一杯鎧をつけた声で言った。ここで少しでも甘い態度を見せたら、つけこまれる。相手は女の寄生虫のような人間だ。この男のために、自分のこれまでの人生はボロボロに食い荒らされたのである。

「昔の亭主が久しぶりに訪ねて来たというのに、そりゃないぜ」

男は、室内から視線を千秋の身体に転じた。衣服の上からその裸身を撫でまわしている目だった。その女を拓いた男の優越と、その後の躰の開発ぶりをまさぐる目つきでもあった。そして過去の所有を現在に直ちに延長したがっている露骨な好色の欲望を浮かべている。

それは寝室に土足で踏み込まれる比ではなかった。汚物を身体に振りかけられたような悪寒を彼女はおぼえた。

悪寒だけではなかった。夫はいまにも帰って来る時間である。こんなところを見られたら、言い開きはきかない。夫は、この男を知らない。だが、この男と夫が鉢合わせをしたら、男はすべてを夫にべらべらしゃべってしまうにちがいない。男にはそういう卑劣なところがあった。

いくら過去は問わないという寛大な夫であっても、過去の最も汚れた部分を占める男との生活を打ち明けられたら、態度を変えるだろう。悪いことに、その最も汚れた部分は、夫に隠してあった。それを打ち明けたら、奥山に去られてしまうとおもったからである。千秋はどうしても奥山を失いたくなかった。過去を許してくれた寛大な夫であったが、過去のすべてを打ち明けて結婚したわけではなかったのである。

過去の中の最も不潔な部分が、年月を経て腐敗を強め、腐臭を撒き散らしながら突如彼女の前に姿を現わしたのだ。こうしている間にも、夫が帰って来たらとおもうだけで、身体が慄えた。それが、男から来る悪寒を一時的にまぎらせた。

「あなたなんかを亭主にしたおぼえはないわよ。私の夫は一人だけよ。変ないいがかりはつけないでちょうだい！　さあ、早く帰って!!」

「そうは言っても、体は忘れねえってね、あんたの体のすみずみまで、おれの体がおぼえているよ。なんなら、きわどい所にあるホクロのありかや、どこをどう押せばどう泣くか、ツボを旦那

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com